

スリランカ・ハプタレー地区幼稚園の教育現場から、
幼児教育における環境についての一考察

A study on the environment at infant education Based on a case on
kindergartens in Haputale area, Sri Lanka

三 井 圭 子* (平成25年2月6日受理)

要約

スリランカ・ハプタレー地区の幼稚園を視察、保育交流の機会を得て、幼稚園が経済的、立地的に厳しい環境と乏しい教材の中で幼児教育がなされている実情から、改めて環境を通して行う幼児教育について考察をする。

日本で実践を経験した者として、支援を必要とするスリランカ・ハプタレー地区幼稚園の現状のなかで環境を活かし環境を通して行う幼児教育をどのように進めるか、その環境に視点を当て、現場の保育を考察すると共に、今後の支援と保育交流を考えていく。

キーワード：環境、スリランカ・ハプタレー地区、幼稚園支援と保育交流

keywords : environment, Sri Lanka・Haputale area,
support for kindergartens and friendly exchange of kindergartens

1. はじめに

スリランカ・ハプタレー地区の幼稚園について、2回の現地視察と保育交流を行った。2011年3月^{*1)}と2012年2月にその機会を得た。現状から学び、自分の経験から、その地域の幼稚園教育の環境について考察する。

スリランカの国の事情、文化、国民性、教育環境等様々の課題はある。しかし、ハプタレー地区の幼稚園の現状を知って自分なりに述べたい。自然は豊かであるが、丘陵地域で交通の便も悪く、経済面では厳しい環境である。幼稚園の建物も古く、園庭もないところが多い。乏しい教具、用具である。そのような環境の中で幼児教育が展開されている。その現状の中で、どのように保育が展開できるかを考えたい。

2. スリランカの情勢

スリランカは歴史のある国である。幾つかの王国が支配していた時代から、オランダ、イギリスの植民地時代を経て、1938年2月4日に独立した。

シンハラ人 (82%) タミル人 (9.4%) マラッ

カラ人 (8.2%) 等で宗教は仏教76%、イスラム教8.5%、ヒンドゥー教7.8%、キリスト教6.1%であり¹⁾、多民族国家である民主社会主義共和国として国政をとっている、日本の北海道より少し小さな島国である。

少数民族のタミル人の分離独立運動から、30年来の内戦状態が続き、政治が不安定で、政治家の暗殺なども頻繁に起こり、国が混乱状態であった。2005年12月には巨大津波で東北部沿岸地域は被害が膨大であった。北部の地域では、戦争の影響で貧困家庭、孤児と問題を抱えている。まだ危険地域に指定され、観光客が入ることができない。

2009年5月19日に当時の大統領マヒンダ・ラージャパクサ氏がイーラム解放のトラ“LTTE”から勝利宣言を行い、内戦終結となり5月21日を国民の祝日と定めた。第三者国の仲介で第1回～第6回の和平交渉もあり、戦争の終結にいたっていた。また多くの国際社会からの支援が行われたりしたのである。国の産業は、農業、漁業、製造業などあるが、他の国への出稼ぎ労働者もあり、経済成長はまだ低い。しかし現在は観光事業にも力

(*みつけいこ 保育科講師 幼児教育)

を入れ、経済発展に力を注ぎ出している。日本のテレビコマーシャルには、スリランカ観光局の名があり、スリランカ航空の宣伝も見られる。しかしまだ発展途上国である。内戦終結後、安定が続いている。観光事業の就業者は、出稼ぎで得た資金を基にマイクロバスを購入し、言語力を活かし観光ガイドをしている人も多い。現地の移動や案内はその人々である。

国土は熱帯温暖地域で、高地は、気温差があり、濃い霧に恵まれ、お茶の栽培に適している。目を覚ますとホテルの窓からは毎日のように濃霧で、肌寒く、外界は見えない状態である。日が差し込むと、見事に晴れる。この気候が農産物の特質を活かしたものとなっている。稲は二期作であり、果物、農作物などは豊富で、現地の人は、食べることはあまり困らないと言う。人々の表情は意外と大らかである。

長年、スリランカの水利、灌漑事業を研究されている龍谷大学教授の中村尚司先生のお話だと、イギリス領時代から、紅茶栽培が盛んで、世界での有数の輸出国になった。紅茶、ゴム、ココナツが三大作物を占めていた。しかし国の混乱期が長く、また他国の生産量の増加、輸出の進出もあり、近年は輸出が伸び悩んでいる状態である。社会資本は相対的に充実し、福祉社会に力を入れ、食糧の無料配布、入院、手術を含む医療の無償化、小学校から大学までの無償教育、農民への各種補助金などがある。しかし財政への負担も大きく、政策の課題となっているということである。幼稚園は学校ではなくそのような支援が行き届かない現実がある。物質的な支援や教員の研修等の支援が必要となる。

スランガニ基金の馬場繁子氏^{*2)}が現地で20年間も幼児教育支援をされている。

3. スリランカの教育

スリランカの教育²⁾は、5歳児からの入学で5学年修了時に Graide5 の試験を受け、National School か 1 A、1 B という学校に入る。成績優秀な児童は奨学金も受けられ、有名校に行くことができる。

義務教育は10年である。中学校（10年生）の卒業試験の成績により、40%が高校に入り2年間勉強する。ここで、将来の進路が決定する者もいる。高校で2年間勉強し、試験を受ける。45%が高校卒業と大学入学資格試験となり、約13.6%のトップレベルの学生が大学進学できる。

国立の大学は13校しかない。競争が厳しいのである。イギリスの植民地時代が長く、教育もイギリスの制度に影響されている。教育施設の差もあり、中央政府の文部省の管轄の学校（National Schools）と州政府の教育省の管轄の学校（タイプ 1 A B、1 C、Status 2）とがあり、施設面、教育内容の違いが顕著である。

中央政府の管轄の施設は充実し、教育課程もそろい質の高い学校であり、そこに子どもを入れるのに非常に激しい競争になっている。

1978年の小学校の入学年齢が6歳から5歳となり、5歳児の1年間は幼児教育として小学校で教育を受けることとなる。

州政府は財政難で学校設備の充実、幼稚園の園舎の建設などがなかなかできない実態で設備の遅れ、教育の質の遅れがある。国際社会からの支援を受けている現実もある。

しかし教育熱心な国民であり、識字率も高く、就学率も他のアジア諸国と変わらない。

4. ハプタレー地区の幼稚園

ハプタレー地区は南部の丘陵地域で、良質の紅茶を栽培し、有機栽培も盛んであるが、生活水準は低い。女性労働者も多く、子どもを預ける、託児所（デーサービス）と幼稚園とがある。幼稚園の就園率も年々高くなっている。

どの地域でも Pre-School（幼稚園）の園児は、3歳児、4歳児である。1月が1学期の始まりである。ハプタレー地区の幼稚園には公的な支援がほとんどなく、劣悪な施設が多い。

ハプタレー地区幼稚園の現状の環境から、この地域の幼児教育について考え、子どもがその環境の中で遊び、学び、どのような保育を展開すればいいのか考察する。

日本の NPO・JIPPO^{*3)} が貧困問題と国際貢

献に取り組みとして、スリランカ・ハプタレー地区の茶農園労働者（主にタミル人）を支援するため、有機栽培紅茶のフェアトレードを始めた。国際貢献として、茶農園労働者の子どもたちの幼稚園の園舎の改築、遊具の新設を進めた。さらに幼稚園教員のための研修事業を計画し実施してきている。

筆者の1回目のスリランカの訪問では、ハプタレーの幼稚園の先生方の研修を行った。

4か所の幼稚園の視察と保育交流を行った。2回目には3か所の幼稚園の視察と保育交流した。訪問した6園の現状³⁾を述べ、特に各幼稚園の環境に視点をおき、その地域の環境を活かした保育を考えることとする。

(1) Haputale Montessori Pre-School

(2011年3月・2012年2月訪問)

園の概要を表に示す。(以下5園も同様)

運 営	ハプタレー市立（公立）
園 児	30人 制服着用
教 員	2人
屋内設備	保育室1 トイレ1 手洗い場1 フロアー1 倉庫1 休憩室1
園庭遊具 (固定遊具)	滑り台1 シーソー1 ブランコ（大小）2 吊り輪1 ジャングルジム2
そ の 他	園庭が広い

唯一の公立の幼稚園であるが、NPO・JIPPOによる支援が行われた。園舎の改築、園庭整備、遊具の新設があり、敷地の拡張、周辺の水路の整備もされた。この地区で一番恵まれた施設である。地域の中心地、高地の街の中にある。周辺の高台の斜面には草花が咲いている。コミュニティーセンターが隣接している。

保育室内は教員の机、椅子、園児の机、椅子の数は人数分があり。写真1)でもわかるように、ペンキ1色で塗られている。

園庭では、大きな木々の落ち葉がきれいに集められている。コミュニティーセンターとの敷地の



写真1) 保育室



写真2) 園庭の遊具

境界に花壇があり、花が咲いているが有刺鉄線がめぐらされ、子どもにとっては危険な状態である。保育者としての気づきが必要である。

園庭に段差があり、遊具設置場所と区別してあるが、石等むき出しになっている場所がある。土が雨で流され、土の補充がなされていない。保育室は窓が周囲にあり、薄い布のカーテンがしてある。日差しは差込み、天気の良い日は明るい。

電灯は見当たらない。ガラスはない。鉄製の面格子のみで、雨の日は吹きぶる状態である。湿気対策として、壁面の作品にはビニールカバーがしてある。この地域の幼稚園はどこともこのような状態である。

シンハラ人、タミル人の教員の2人、それぞれ同じところで、タミル人の先生にはタミルの子ども、シンハラ人の先生にはシンハラ人の子どもと別れて机、椅子が並び向かい合っている。

言葉の問題だろうか、宗教の違いもあるが同じ部屋である。

シンハラ人とタミル人とが普通に幼稚園で生活している自然な姿はとても良い。

また、子どもたちは園の周辺の草花にも目をとめるであろうし、手をさしのべるであろう。遊具で十分に遊べる。園庭も駆け回ることができる。しかし運動遊びをより楽しくする運動用具は見当たらない。

豊かな自然、広い園庭を活用する保育の展開ができる。園庭の段差は高さがあるので、3歳児にはどうであろうかと思うが、運動遊びが有効にできる。

飛ぶことを楽しむ、狭い石の上を歩く等、安全を考慮し、スリルを楽しむこともできる。運動遊び、ゲーム遊びができ、今ある環境を子どもと一緒に発想し、創造することで、遊びが広がる。

(2) Nawalar Pre-School (2012年2月訪問)

運 営	プランテーション経営者(私立)
園 児	22人 制服着用
教 員	1人
屋内設備	保育室1
園庭遊具 (固定遊具)	なし
そ の 他	トイレ、手洗い場なし 園庭なし

保育室内は南側にガラス窓があり室内は明るい。北側の窓は木の板で塞がれていた。

室内の半分は広いスペースがある。園児の机、パイプ椅子、教師の机はある。

掲示物が貼られている。電灯はない。壁は白く塗られている。床は土間で土が光り固められている。天井は木材がむき出しである。

園庭は建物の周辺が、集落の広場であり、村の人々と共有している。

2000m近い山々の谷間にあり、四方がお茶畑である。そのお茶畑の広いくぼみの土地に家屋が密集している集落である。電線は周辺に回らせてある。電気の使用家庭が何程あるかは定かではない。交通の便として、山の中腹にはバスが通る道がある。



写真3) 教員と子どもたち

園までの道のりは、自動車を降りて、集落へは2kmの道を徒歩で進む。道端には花が咲き、集落の近くでは川が流れ、周りは草が生い茂るが、そこで洗濯をする姿もあり、身近に日常生活が見える。子どもが生活を真似て楽しむごっこ遊びの展開になるだろう。

道路周辺の山肌にも色々な花が咲いている。ランタナ、カンナ、朝顔、ダリア、他色鮮やかな赤、黄色と日本の春、夏の花である。豊かな自然は目の前にある。交通の便がある道路まで、20分以上急な斜面を登るので、人の生活にとっては不便さがあるが、子どもにとっては、脚力がつき、持久力も身に付くのではと思う。

草原へ意図的に出かけ、草花を摘む、水の流れの中で遊ぶ、川には生き物もいるだろう。日本では散歩、園外保育があるように、子どもたちと周辺に出かけ、体で自然を感じ、自然の中での遊びを経験すると豊かな心の育みとなり、同じ経験を共有できる。子どもが発見したこと、共通の遊びへ広がる。

保育室は清潔感があり、天井にカラフルな布を張ると、子どもたちも、心が和らぎ、落ち着く。作品を吊る、揺れるおもしろさ、吊るす紐の長い、短いと子どもが興味を示し楽しむ。そこに、教員の環境構成の必要性が出てくる。

周囲の壁面には、教師の手作りであろう教材が多く貼ってある。高地で急に雨が降り、朝夕は濃い霧のため、室内の子どもの作品、先生の手作りの教材が湿るので、同じようにビニールカバーがしてある。



写真4) 支援の遊具

動物の名前、色彩、文字、数、量等知的教材である。

教員が研修の効果を示し、工夫していることがわかる。

貴重な教材の紙類なのである。

どこかの国のNPO、NGOからの支援の遊具が少し机の上にある。写真4)で、まだ新しく、使っているのかは定かではないが大事に置いている。遊び用ではなく教員側からの教材としてではないかと思われる。

遊び中心の日本の保育との違いである。おもちゃとして使用して欲しい。

室内の床は土間で、半分のスペースに机、椅子がきれいに並べられて、園児が座っている。子どもが座って遊ぶ時は、板、シートがほしい。その広い空間はおもちゃなどで遊べるスペースになるであろう。使い方と言わなくても、そこにケースから出すなど置いておくだけで、子どもは手に取るし遊び始めるであろう。並べる、積む、何かに見立てる等工夫し、想像するであろう。自ら物に興味を示し遊びへと進む。自主的に遊べる空間を作り出すのである。

地域の人々は、日本からの客ということで、保護者と共に大勢集まり園児の後ろで、交流を静かに見守り、物珍しさから、興味津々である。

幼稚園という場所に大人も集まる事は、幼児教育に関心を示し、自分たちに何が出来るかを考える機会になる。訪問者のリーダーである中村教授が、何の目的で、どのようなことをするか、保育の交流の説明をされた。保護者、近所の人々も熱

心に聞いていた。

日本語をシンハラ語にそしてタミル語への通訳で英語も入る。いくつもの言葉が聞ける。子どもたちも、初めての日本人との関わりである。自分たちの国以外の人々との出会いは新鮮であるし、驚きを持ち、心に強く残るであろう。小さな子どもにとっては大きな経験になる。人とのかかわりが広がり、日常と違う体験ができることで、色々な思い、人、言葉への関心が深まる。子どもの成長にとって良い刺激となる。

園舎の外は、集落の共通の広場である。遊具は設置されていない。室内での保育が中心であり、机の前に座り、色々な物を作ったり、描いたり、見たりという保育内容である。何かを教え、学習するところとして位置付けられている。

ハプタレー地区の幼稚園では、知的教育が主流である。

手洗い場はなく、遊んだ後、おやつ前の手洗いはできない。保育室だけの建物である。それすらなく、民家の軒下で、青空のもとで行われている幼稚園もあると聞く。

給食はない。衛生面を考えて、お弁当の持参もなくPM1時30分～2時に降園して、家での昼食となる。お客様が来ると必ず、お菓子(パウンドケーキ)飲み物(ジュース)のもてなしがある。来客への接し方もその場で見て学べる。

その後、それを子どもたちも一緒にいただく。おやつとして昼食まで口にするという。みんなでおやつを食べる楽しさも味わえる。それは子どもにとっては大いに喜びになり、また少し空腹を和らげる。

(3) Saraswathi Pre-School (2012年2月訪問)

運 営	プランテーション経営者(私立)
園 児	29人 制服着用
教 員	2人
屋内設備	保育室1
園庭遊具 (固定遊具)	シーソー2 ジャングルジム1
そ の 他	トイレ、手洗い場なし 園庭狭い



写真5) 保育室

窓は開いてない。入り口のみ。電灯はない。

マーケットの建物の一角を間借りしている。マーケットは意外と広いスペースがあるが保育室内は4畳半程の広さである。園庭も生け垣で囲まれ狭い場所である。その中に2台の遊具が設置されている。

JIPPO が支援をするということで、話が進められていた。しかし、プランテーションのオーナーの反対でできなかった。ここに現地の意向が入り難しい面がある。茶農園ではオーナーの意見が支配的であり、階級制もある。

狭い保育室、園庭での日頃の子どもの姿はどのようなのかと思う。大勢の子どもを広いところで学ばせたい、園庭でのびのび遊ばせたいと思いは誰もが一緒であるが、支援を待っている状態である。再度のNPO・JIPPOの訪問を歓迎された。

ベテランの園長先生で、子どもに対してのお話はわかりやすいのか、子どもが静かに聞き入っている。日本語から、英語、シンハラ語からタミル

語への通訳であった。

壁面の展示物は、動物、鳥、果物などの絵、丸の形の色紙を同じ数を並べ貼っている。

生き物の名前、数量、大小、形の違い等、知的学習である。先生は教える立場、幼児は学習するという学校式である。

先生の手作りの教材、幼児の作品と全面に貼っている。



写真6) 子どもの作品

画用紙等の用紙類、筆記道具等必要なものが不足している為、作品全てが大事な教材である。また雨天の場合の保育はどのようになるのであろう、室内には全員入って活動できない状態である。伸び伸びと遊ぶという姿が想像できにくい。

また遊具での遊びは29人の子どもが順番待ちで遊ぶであらう。トラブルもおこる。狭い所ではなかなか、子どもらしい活動ができにくいだろうが、そこに、友だちとのかかわりが生まれてくると知恵も出てくる。

室内の机ではグループ毎に絵画や制作をし、他の子は外遊びや他の活動と、それなりの工夫が毎日続けられていると思う。

集落の中の広場がないが、周辺には木々や草花はあり、自然を活かすことはできそうである。

保護者は綺麗な服で園の周りを取り囲み様子を物珍しく、静かに見ている姿があった。

小学生も集まり、大勢になる。子どもたちは安心し、落ち着いている。日本人へは、好意的だと聞く。

子どもは宗教的な儀式で出迎えてくれた。儀式の流れは大人からの指示であらう。

人を招く心を伝える大事さを思うし、行動するとそこから学ぶのである。

文化の伝承という大事な環境がそこにある。

(4) Omi Annal Pre-School (2011年3月訪問)

運 営	プランテーション経営者 (私立)
園 児	55人 制服着用
教 員	2人
屋内設備	保育室1 電灯2
園庭遊具 (固定遊具)	なし
その 他	園庭、トイレ、手洗い場なし



写真7) 教員と子ども

近隣に紅茶の製造工場、コミュニティの建物もあり、集落の中央である。

建物の周辺は狭く、隣接している建物との間を子どもの活動の場として、利用している。下水が直接に流れ、ぬかるみになり、人の通路である。犬の糞尿があり、段差で石がむき出しになっている。

保育室内は狭く、教師の机、子どもの机、椅子が並べてある。広いスペースはない。

各自持参の水筒がある。

室内の周囲の壁、窓には子どもの制作、数字、形、写真、動物の絵とぎっしりと貼っている。また天井から数量、形等色々な教材がぶら下がり楽しい。教員の手作りの教材用も多く貼っている。ただ展示し、子どもが手にとって使うということはない。

手にして、それで遊ぶ事よりも、全員の前で見せて話す事に使用している。教師用の教材で、子どもが自ら遊びを発見し、学ぶというところまではいかない。この園も画用紙類、クレパス類、ペン類等すべて貴重品である。2009年度の初めてのタミル人教員研修、ティチャートレーニングで⁴⁾受けたことを熱心に保育内容として取り入れている事がわかる。研修の内容をどの幼稚園も大事にしている。

普段通りの保育をということで、広場に出て先生の前に並び、先生が拍子木のようなものでリズムをとり、リズム体操をする。体を動かすことはやはり大好きなようであるが、先生と同じようにすることを要求されている。初めのうちは覚える喜びがあり、みんなと一緒にする嬉しさがある。そこからどう子ども自身が楽しみ、子ども同士で普通の遊びの中にそのリズム体操が広がる。やらされる事から、やってみる、やって面白いとなるとよい。CDプレイヤーもなく、歌も教員の口移しで覚えるのである。音楽的な教具はほとんどないが、歌やリズムを楽しむ。手拍子、声を出して歌う、拍子木の音から歌を歌ったり、体を動かしたり、子どもの喜ぶ姿がある。日本でも、手作り楽器を作る。廃材を利用し、木の実、植物の種、小さな石ころ等、音を出すもの、リズムをとる等、工夫し作り出すことができる。そして素朴な音楽が楽しめる。教員にそんな技が必要となる。園児に作る喜び、それを使っての音、リズムで遊ぶおもしろさを感じることができるよう保育を進めると、表現の保育に繋がる。

(5) Little Rose Pre-School (2011年3月訪問)

運 営	プランテーション経営者 (私立)
園 児	20人
教 員	2人
屋内設備	保育室1 トイレ1
園庭遊具 (固定遊具)	なし
そ の 他	保育室は小学校と共有 園庭なし

小学校が試験ということで幼稚園は休み。子どもの姿はない。

保育室は一角に机、椅子が積まれてある。屋根と窓の間から日が差し込んでいるが暗い。電灯は見当たらない。

園舎の外にトイレはあるが、便器は枯草がいっぱいで、使用されていないし手洗い場もない。

室内は掲示物も少なく、数の掲示物が天井に10枚ある。閑散とした状態である。

保育室内は荒れた状態であるが、建物があるというだけである。

山の斜面に建てられて園舎周りには空き地はない。人が通るだけのスペースはある。

上方に少し新しい小学校が1棟建っている。下方には密集している集落が見える。

茶畑以外の狭い土地を耕し農作物を植えている、家々の周りにはバナナの木などもある。

室内は小学生が使用している机、椅子がとても乱雑に散らばっている様子なので、内容のある保育が展開されているかは疑問である。

ヒンドゥー教の集会場はとても立派で、広場もあるが、そこで園児たちが遊ぶことができない。遊具もなく、やはり外遊びは急な斜面を上り下りすることであろう。

教員は無償で、保育料の徴収が困難な状況である。経済面、物質面の支援を待つ状態で、教師自ら何かをするというところまで行かない。手当があっても意欲が持てる。まだまだ若い教員が幼児教育への情熱を持つための何らかの支援の必要性を強く感じた園である。



写真8) 園児が使用している一角



写真9) 園舎裏の坂道

小学生(1、2年生)と同じ建物で、生活している。異年齢交流、遊びの共有、人のかかわりの広がり、年上の子どもから教えられる喜びが持てるであろう。

そこに小学校教師との共同作業も必要になり、連携ができる。人的環境の効果的なねらいで、保育の展開ができる可能性がある。

新しい校舎から小学生の子どもたちは手を振り、笑顔を見せる。少し心が和むと共に、園児たちの日頃の生活が楽しいことを願う。

小学校の敷地の運動場での運動遊びも可能であろう。多くの斜面を自然の滑り台にし、安全に配慮して段ボール等で滑り降りることもできるであろう。

この地形を活かす方法を子どもと一緒に考えると、楽しい遊びの創造ができる。また周辺のお茶畑が広がり、自然は豊かである。

茶農園で働き、畑を耕す大人たちの働く姿は毎日見ているであろう。